

「文化振興ビジョン」(2012)の検証

1 市民文化活動の充実と支援

すべての市民が何らかの文化的な活動に参加したいと願えば、身近にその受け皿が用意されていることは、望ましいかたちです。市内各地域の公民館では地域に密着した幅広い生涯学習の場が用意され、文化会館や市民館、図書館、歴史民俗資料館などでは、独自の事業により市民文化活動を支援しています。また民間においても、山陽小野田市文化協会に加入する180団体以上の多彩なグループがそれぞれに文化活動を営みながら、協会としても市民文化祭などの全市民的な文化活動を展開しています。

そうした個人・団体の市民文化活動に対し、一層の充実を図るために、様々な形で、その育成・支援に取り組みます。

●文化活動に対する支援(文化協会や加入団体に対して)

一定の支援(予算の範囲内ではあるが)を継続的に行っているが、より多様な形での支援(助言やコーディネイト、団体の紹介など)も検討すべきであり、さらに協議を深める必要がある。

●公民館や図書館等における文化活動の状況と支援

公民館においては住民の要求等に応じた形で様々な講座・教室が開催されており、一定の利用がある。ただ、全ての市民ニーズや要望に対応したものになっているかどうか等については、そうした声をさらに聴くことが必要であること、また文化振興を含めた情報発信の拠点である図書館や歴史民俗資料館では積極的な企画が展開されているものの、部局間の連携については決して十分ではない。

●文化会館における文化活動の状況と支援

文化会館は貸館業務のほか、自主文化事業を行っているが、その回数は減少している。(市の文化事業に関する予算に大幅な変化はない)また、団体相互の交流の場として、また育成の場としてはまだまだ十分な活用はできていない。なお、文化振興にあたって、文化会館だけで全てを進めるのではなく、近隣自治体の施設との連携も検討すべき。

2 活動の場とその整備

日常的な活動の場は内容によっては自ら準備することが可能だとしても、発表会などの場となると、一定の規模と設備の整った施設が必要になります。同時にそこは、各種団体間の交流の場ともなり、そうした活動の場、あるいは発表の場、さらには発表の機会の確保は、身近な文化芸術の振興や伝統文化の伝承には欠かせない重要なものです。しかしながら、民間の文化施設が少ない本市にあっては、当面は行政が提供する施設の利用が中心となり、そうした場として文化会館と市民館を中核として図書館、歴史民俗資料館などのほか、公民館、きらら交流館、それにきららガラス未来館や竜王山オートキャンプ場などの体験型学習施設などが用意されています。

今後、それらの施設の現状を改めて検証しながら、文化振興施設としてふさわしい改善を進めるとともに、必要であれば新しい施設の導入も検討していきます。

また民間の施設についても、幅広く調査しながら、その活用を一層進めることが重要です。

i) 文化施設の改善・整備

市内の各文化施設においては、建設から相当の年数を経ているものも少なくありませんが、特に改善が急がれる施設として、老朽化の著しい市民館が挙げられます。

市民館は、市の文化振興拠点である文化会館とは異なる環境や機能を持ち、活用方法も多様であるため、その良さを引き出せるような改善を図る必要があります。また、各公民館も老朽化・経年劣化が激しく、地域の市民文化活動を支える施設として必要な整備を進めていかなければなりません。

●文化会館の整備

現ビジョン策定後に老朽化が顕著。年次的に備品の更新や設備改修に取り組んでいるが、老朽化等に伴う雨漏り等の抜本的な改修ができていない。文化活動の拠点として活用するためにも、施設の長寿命化は必須であり、早期着手が望まれるほか、より多く「文化会館に出向いて来てもらう」ことや常に人が集まる状況をつくる工夫(落ち着いて話ができる、楽しめる)が必要。※その他も含めてだが、ソフト戦略があって、その展開に必要なハード整備であるべき。

●市民館の整備

耐震改修を含む施設整備を実施。ただし、公民館との併設という造りであることなどから、文化施設としての側面からすると、「その良さを引き出せるような改善」には至っておらず、また文化会館との使い分けができていない。(ホール収容が文化会館749人、市民館文化ホールが445人)

●その他の文化振興施設の整備

公民館では、講座・教室等の成果物の展示が中心で、文化振興施設と位置付けた上での事業展開とは言えない。また、図書館、歴史民俗資料館、きらら交流館、きららガラス未来館や竜王山オートキャンプ場についても同様。今後は、それぞれの施設の内部構成を確認しながら、展示(ギャラリーとしての機能)あるいはパフォーマンスのアウトリーチ会場としての活用をさらに検討する必要がある。

●民間施設の活用の状況

文化芸術作品を多くの人に鑑賞してもらうために大型商業施設であるサンパークとのコラボが主となっている状況だが、さらに身近な民間施設（スーパーやコンビニなども含めて）での展示等も考える中で、市民の生活の中に文化芸術のある環境をつくることが重要。また、それぞれの施設の特色・特性等を見た上で、何ができるか、といったことも十分考えた上で活用を検討すべき。

ii) 市民ギャラリー機能の充実

音楽や舞踊など、舞台を利用して発表する場はありますが、絵画や写真などを展示する常設のギャラリーは市内にありません。「市民ギャラリー」は、地元アーティストに発表の場を提供するとともに、市民にとっても日常的にさまざまな芸術に触れる機会を創出します。今後、各施設において、発表の場としてのギャラリー機能の充実を図るとともに、常設ギャラリーについては民間施設の活用も視野に検討していきます。

●（民間も含めて）アーティストの作品展示にふさわしい場の検討

進んでいない。まず、何を展示するかの確認作業もできていない。

3 人材の確保と育成 ～民間との連携～

せっかくの施設を活かすには、管理運営にあたってあらゆる面で利用しやすい方策をとるとともに、その使用目的に明るい専門的な人材の確保が欠かせません。また、文化芸術振興についても専門性を持った人材の確保が重要となります。そのためにも、行政職員の積極的な研修参加をすすめる、また適切な外部人材の登用や、指定管理者制度の導入、NPO法人など民間との連携を図りながら、人材の確保と育成に努めます。

●専門的な人材の確保と活用

民間登用の館長を配置していた時期もあるが、その後は職員に戻っている。現在はアドバイザー制度をとって必要に応じた形での助言を得ることはあるが、全体のアートマネジメントをし得る専門のコーディネーターは不在であり、今後、こうしたスタッフの存在は不可欠となる。

●行政職員の研修参加

県内の施設（セミナーパーク等）での文化に関する研修がなく、専門的な資質や知識向上のための研修には参加していない。一定の知識は必要だが、専門性については外部人材の登用が望ましい。

●指定管理者制度の導入

文化施設でいえばガラス未来館と宿泊研修施設であるきらら交流館のみ指定管理者制度を導入済。文化会館については、収益性等もあって導入に至っておらず、館長の民間登用で終わっている。ハード・ソフト両面にわたって、文化振興への貢献が期待できる組織・団体を求める意味でも、制度の導入については検討の余地がある。

4 鑑賞機会の充実

文化芸術に親しむ心を育てるには、普段触れることがまれな優れた芸術公演などを鑑賞する機会を広く市民に提供することが重要です。特に感受性豊かな子どもたちにとっては、胸弾む感動の記憶となって、自ら文化活動に加わるきっかけにもなります。こうした芸術公演は単独開催だけでなく、近隣自治体との連携も含めて、中・長期的な計画のもとで鑑賞機会を確保していきます。また、一流の芸術公演の際に公開練習を組み、市民にその一端を味わっていただく機会を設けるなど、視点を変えた取り組みなどを通して、文化芸術との新たな接触の機会を創出することにも努めます。

5 子どもたちの文化芸術鑑賞機会の充実

文化的な風土を育てていくうえで特に重要なことは、子どもたちが幼い時期から文化や芸術に親しむことです。美しい自然、身近な文化芸術や文化財から、一流アーティストによる文化芸術に至るまで、子どもたちが自らの心と体で触れることによって、より豊かな情操が育っていきます。現在本市では、山口県主催の山口県巡回芸術劇場、(財)日本青少年文化センター主催の青少年芸術劇場、文化庁主催の次代を担う子どもの文化芸術体験事業（巡回公演）、(財)地域創造の公共ホール音楽活性化事業など、学校現場においても本物の文化芸術に触れる機会を提供しています。また、主催文化イベントでは親子で楽しめる公演を企画したり、クラシックコンサートなどでは子ども向けに格安のチケットを用意したりするなど、気軽に文化芸術に触れる機会を提供しています。これらの活動は大人や保護者の理解はもとより、学校教育現場との連携も重要です。今後もそうした連携を密にしながら、子どもたちの文化芸術鑑賞機会の充実に努めます。

●芸術公演等の実施状況

定期的開催はしているものの、広く市民に鑑賞機会を提供するには至っていない。魅力的な芸術公演のコンスタントな提供と並行して、アウトリーチ等の「届ける」取組みを増やす必要がある。また、単発的な取組みが多く、市民ニーズや幅広い分野も包括した内容とするための中・長期的な計画による実施に至っていない。

●子ども対象の開催状況

特に子どもたちに小さい頃から文化芸術に触れさせるといのは極めて重要であり、市が文化芸術に取り組む大きな理由となり得る部分。伝統文化も取り入れながら、現在の学校との連携に加え、さらに幅広い取組が望まれる。

●近隣自治体との連携開催

平成28年度の長門市との共同主催のみで、ほぼない状況。単独招致でない近隣とのコラボ、連携は両者にとってメリットがあるものの、そのためには現在の単年度制予算に基づく実施ではない、例えば財団等による運営等が必要となる。

●練習公開などの取組

視点を変えた取組みとして行っていたが、現在は無い。文化芸術をより身近に感じてもらうために、市民参加型の公演なども要検討。

6 推進体制の確立と団体の支援

多様な文化の振興を図るためには、推進体制の確立が必要です。全市的な文化組織としては山陽小野田市文化協会があり、市民文化祭を市と共同で毎年開催するなどさまざまな催しを行っています。その運営は、資金面及び専門スタッフが十分とは言えず、決して万全とは言えないのが現状です。今後の文化振興においては、市と民間との役割分担も進めながら、官民協働の新しい体制による事業推進が求められ、その確立・整備について検討を進めます。

また、営利目的とは縁遠い文化活動では、資金不足が共通の悩みです。各団体が自主的な財政運営の健全化を図ることは重要ですが、市としては日々の文化活動が停滞しないよう、文化芸術活動市民や団体に対し一定の支援を行います。

さらに、将来的には、全市的な文化振興の一翼を担う財団の設立についても検討課題として調査・研究を進めます。

●文化協会の状況

ビジョンの中での指摘「資金面及び専門スタッフが十分とは言えず」については現在もほぼ同様な状況。

●官民協働の新しい体制？財団設立の検討状況

進んでいない。ただし、長期的なプラン作成や近隣との共同実施のためには、財団設立は不可欠となることから、このことも含めて、市と民間の役割分担による事業推進のための早急な検討が必要。

7 文化情報の発信

市民によるさまざまな文化活動は、その情報の多くを主催する団体や個人が自力の範囲内で発信している状態です。もちろん、市広報紙にも公演情報などが掲載されますが、紙面の制約もあって、すべての情報を十分に市民に届けられていないのが実情です。これら膨大な量の情報を収集・整理し発信するためには、定期的な冊子の作成・配布、インターネットのホームページ活用、コミュニティ放送局の活用など、あらゆる情報発信ツールの活用が重要となります。今後もそうした情報発信ツールを十分に活用し、さまざまな文化情報の収集・発信に努めます。

●文化活動情報の発信

多くの団体の活動紹介に至っていないこと、また多彩なツールによる発信はされているものの、それで十分伝わっているかは疑問。断片的ではなく、総合的・総括的な情報発信体制の構築が必要。

8 特色ある文化イベントの開催

平成6年に文化会館が建設され、翌年の平成7年から継続して実施している「ピアノマラソン大会」は、本格的なホールで誰でも参加できる特色あるイベントとして定着しており、市内はもとより市外や県外からも多くの出場者があります。また、平成18年の国民文化祭の翌年から継続して実施している「山陽小野田少年少女合唱祭」は、例の少ない児童合唱の祭典として、また他団体との交流事業として意義深いものがあります。そのほか、より多くの人が参加できるように企画した世代別のイベントや、一流芸術との交流事業など、本市独自の特色ある文化イベントの充実発展を図るとともに、民間活力を利用した新たな発想による事業や新規交流事業の展開にも努めます。

●独自文化イベントの開催状況

文化会館の音響の良さ等を活かした独自イベントの検討や、パフォーマンスのみならず、ビジュアルアートのさらなる展開も検討すべき。既存の取組についても、マンネリによる陳腐化に陥らないよう、改めて見直すことが必要。

9 ガラス文化の振興

旧小野田市出身のガラス作家 故竹内傳治氏の指導のもと平成13年に始められた「現代ガラス展」は、若手ガラス作家のためのコンペティションとして、3年に一度のトリエンナーレ方式※で開催しています。現在この公募展の位置づけは高く、若手作家の登竜門的コンペティションとして高い評価を受けており、本市が発信する文化交流事業として貴重な存在です。この現代ガラス展は、古代の須恵器から近代の硫酸瓶に至る窯業の伝統の上にガラスという新たな文化の定着を図るための事業の一環であり、この「現代ガラス展」と公設工房「きららガラス未来館」を基軸としたガラス文化の振興を本格的に前進させる時期に来ています。ガラス文化の薫るまちとしての意識の定着に力点を置き、本市の特色ある文化振興事業の一つとして明確に位置づけ、その充実・発展に努めます。

●現代ガラス展の実施状況

定期的で開催しつつ、近年では萩市や東京での開催など実施会場拡大にも取り組んでいる。

●きららガラス未来館の状況

リピーターを含む体験利用者は多い。

●ガラス文化の市民への定着・浸透

ガラス体験についてはリピーターも含め多くの市民が体験講座等を経験してきている。また、現在、ガラス作品のブランド化を進めたり、定期的なガラス展の開催やふるさと納税の返礼品としてガラス作品を取り上げるなど、外部に対するアピールについては少しずつでも進んでいると思われるが、ビジョンでいうところの「ガラス文化の薫るまち」という意味で、市民への意識浸透については、まだ十分進んでいるとはいえない。

◇その他

かるた文化

クイーンを2名も輩出し、後輩への指導も積極的にされているという、他にはない歴史や取組は、かるた文化の普及のみならず、市の知名度向上や郷土愛醸成にもつながる。